

介護福祉への学習意欲を高めるための教育方法

～「実習指導」にゼミ方式を取り入れて～

阿南國子 高桑慧子
田中佑子 高福原信子
伏見 強

I はじめに

介護福祉士教育が始まって16年が経過した。今日、介護福祉士養成施設には社会のニーズと要請に応えるべく質の高い人材を育成する役割が求められている。

本学福祉学科はこうした時代の要請に応え、平成10年4月に開設された。その目的は人間性豊かで、介護の実践に貢献している専門的知識はもちろんのこと介護福祉をとりまく環境の変化にも対応しうる自主性を持った感性豊かな介護福祉士を養成することである。しかし生活経験の乏しい学生に、利用者の生活の活性化へむけたニーズを引き出していく能力をどういう方法で身につけさせるかが課題となっているところである。介護福祉士養成カリキュラムにおける「実習指導」（演習）は、体験を通して学んだ知識、技術、態度を具体的かつ实际的に理解できるように指導することである。それは450時間に及ぶ介護実習を有効的に展開するための導入教育として位置付けられている。そこで本学科では、高齢者を理解し、生活の活性化させるとりくみとして開設当初より「実習指導」（演習）の時間増として、2回生前期に各教員がテーマを設けてゼミ形式で「実習指導Ⅱ」（課題学習ゼミ）を開講してきた。このとりくみはグループのもつ力を発揮し各々の学生のもつ力を延ばすなど自主性、創造性を育てるのに一定の成果をあげていると考えるのでここに報告する。

II 「課題学習ゼミ」について

平成10年スタートした当福祉学科は平成11年2月、第1期生の初の施設介護実習を終えた。この初の施設実習を振り返り、学生たちのアンケートも踏まえて、今後の課題を整理した。

「課題学習ゼミ」の構想は全ての学生たちを実習に適應させたい。介護の楽しさに気付かせたい。一斉教育でカバーできない、また是非学ばせたいものを時間割の空き時間を活用し、もっときめ細かく、学生たちに関わってみようと、討議を重ねる中でゼミ方式の「課題学習ゼミ」の構想が生まれた。

《1段階の実習を終えて課題として挙げたこと》

- ・高齢者を理解し、共感できる話題が少ない
- ・コミュニケーションがうまくとれない

- ・高齢者の愛唱する歌を知らない、一緒に歌えない
- ・高齢者の生きてきた時代を知らない
- ・施設の高齢者に適したレクリエーション企画運営する能力が欲しい

《「課題学習ゼミ」の位置付け及び方法》

- ・2回生の前期2コマをゼミ方式の「課題学習ゼミ」を新設する
- ・「課題学習ゼミ」は教科「実習指導」に追加し、評価する
(平成11年には、まだ「実習指導」の教科のカリキュラム時間は増加になっていなかったが、従来の「実習指導」はそのまま2回生前期の別1コマで介護過程の展開、KOMI理論を行った)
- ・テーマは担当教員が提示し、授業展開も各担当教員に任す(介護の教員5名が全員で当たる)
- ・ゼミ形式のグループ学習にする(1グループ10名程度となる)
- ・グループ分けは学生の希望調査をし、教員全員で決める
- ・研究したものを小冊子にまとめ、発表会を行う
- ・発表会には1回生も聴講参加(動機づけ)とする

《「課題学習ゼミ」の目的》

- ・高齢者への理解と共感の心を育てる
- ・ゼミ形式による教員とのふれあいの時間を多く持ち個々の学生の個性を引き出す
- ・グループワークを体験させ、自己の責任や共同作業の楽しさを学ばせる
- ・チームワークやリーダー能力を培う
- ・テーマを決めて研究し、レポートにまとめ研究発表することを体験させる
- ・学生の創造性、自発性、自主性を育てる
- ・介護の独自性を学び、介護の楽しさ、喜びを感じさす
- ・施設の高齢者に合ったレクリエーションを企画運営する能力を育てる

Ⅲ 1期生より今日までの経過

1期生より、5人の教員がテーマを設け、学生は希望するテーマ別に分かれ、担当教員指導のもと課題学習に取り組んだ。取り組み学んだ内容は冊子に作製したが発表は初回のため、教員主導で行われ、発表会には1回生も参加し1回生の動機づけにした。

又グループによっては施設にセッションに行き、入所者とコミュニケーションを深め入所者の生活の活性化の実現を援助するという具体的な体験をした。

引き続き毎年、各教員別に課題学習を行っていくうちに、少しづつ学生の課題学習に対する意識に変化が見られ、今まで形式については教員が指示していたが、5期生になると学生自身が研究した事を、発表する際自主的に企画運営するようになり、課題学習発表に向け各グループの代表が企画運営委員会を結成し企画運営にあたった。学生は発表のプログラム、司会、進行演奏ホールでの照明、音響、参加

者全員の座席表の作製等、細部にわたって打ち合わせを何度も行い、連日リハーサルを行い、見事に自主性を発揮した。

以前より、アクティビティ・サービスに関するカリキュラムを組み、授業をしていたが、課題学習を重ねるにつれ、アクティビティ・サービスに対する関心も高まり2003年より養成施設の認定をうけた「養成カリキュラム」を終了した学生にアクティビティ・ワーカーの資格取得が可能となった。

又、学習したことを冊子にして製本しているが、年々情報処理能力も高まり、コンピューター処理された冊子が作成されるようになった。5期生は1回生のとき聴講参加したが、手元資料がなく、理解が不十分だった体験に基づき1回生用に抄録を作成し配布した。

	1～5期生のテーマ一覧	特記すべき事項
1期生	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽と癒しについて (忠政敏子) ・在宅介護について (村尾壽美) ・老いを防ぐ歌体操 ～奈良文化女子短期大学オリジナル～ (福原信子) ・アクティビティ・ケア ～現状調査～ (田中佑子) ・高齢者の歩んだ道 ～食生活の移り変わり・女性の人生～ (高桑慧子) 	<ul style="list-style-type: none"> ・初回のため、発表会の運営は教員指導 ・1年生参加
2期生	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽と癒し ～回想法～ (忠政敏子) ・紙芝居・金色夜叉 (村尾壽美) ・リハビリ歌体操 (福原信子) ・アクティビティ・ケア (田中佑子) ～新聞特集に見るアクティビティ・ケアの実例を調べる～ ・高齢者の歩んできた生活 (高桑慧子) ～昔の食生活・昔の歌・昔の衣生活～ 	<ul style="list-style-type: none"> ・施設へセッションに行く
3期生	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者のケアと音楽 ～回想法～ (忠政敏子) ・歳時記 (絵と大正琴の演奏で表現) (村尾壽美) ・楽しくできるリハビリ歌体操 (福原信子) ・アクティビティケア (田中佑子) ～レクリエーションアクティビティをプログラムしよう～ ・高齢者の歩んできた生活 (高桑慧子) ～食文化について、職業について、結婚について、遊びについて～ 	<ul style="list-style-type: none"> ・付属高校福祉特進コースの生徒聴講参加 ・企画委員を作るも十分機能せず
4期生	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者のケアと音楽 ～回想法～ (忠政敏子) ・楽しくできるリハビリ歌体操 (福原信子) ・アクティビティケア ～日常生活を豊かにする年中行事～ (田中佑子) ・高齢者の歩んだ時代 ～昔の遊び、食文化の移り変わり～ (高桑慧子) ・明治、大正、昭和の遊び、お手玉作り (阿南國子) ～遊びを通してアクティビティサービスを学ぶ～ 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の介入が多く学生の主体性が伸ばしきれなかった
5期生	<ul style="list-style-type: none"> ・リハビリ歌体操 ～笑顔で元気花咲くりハビリ歌体操～ (福原信子) ・アクティビティ・サービス ～生活の快を援助～ (田中佑子) ・高齢者の歩んだ時代 (高桑慧子) ～結婚、食生活、若者の行動、態度、昔の遊びについて～ ・明治、大正、昭和の遊び、お手玉作り (阿南國子) ～伝承遊びお手玉を通して～ ・楽しみながら学ぶ「音楽セッション」 (伏見 強) 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生が企画運営委員会を設け、冊子作成から発表迄自主的に行い好評であった ・1回生に対し抄録を作成

IV 本年度の課題学習ゼミ

平成16年度は共通テーマを『高齢者を理解する』としスタートした。

◇目標：高齢者を理解しその生活の活性化の実現を援助する具体的方法を学ぶ

◇研究のまとめ：B4で20枚程度の冊子にする

◇発表：7/14(水) I～II時限 1回生も参加

◇評価：研究・発表内容、学習態度を「実習指導」として評価する

平成16年度担当教員別テーマ

- ・楽しみながら出来る「リハビリ歌体操」……………福原信子
- ・日常生活を豊かにする「年中行事」……………田中佑子
- ・高齢者の歩んできた生活……………高桑慧子
- ・高齢者が愛唱する歌について学ぶ……………阿南國子
- ・楽しみながら学ぶ「音楽セッション」……………伏見 強

◇楽しみながら出来る「リハビリ歌体操」

1. はじめに

歌体操とはうたを歌いリラックスした雰囲気の中で唱歌、童謡、ナツメロ、演歌などの音楽に合わせて手足を動かす体操のことである。人間が身体を動かすことは呼吸器、循環器や腸などの活動が活発になるという生理的効果のみならず、楽しみや喜び、生きがいとなる心理的効果を育むことになる。歌と体操による大脳皮質への活性化は痴呆防止につながり、老化した筋肉への刺激によるストレス解消と生活のリズムをとりもどす役割を果たす。歌体操は立ち姿勢でも、腰掛けながらでも、身体に障害をもった人でも楽しく参加することができる。なつかしい歌を口ずさみながら身体が自然に動く、心が動けば身体も動く、高齢者や障害者が心を開放し日常生活の活性化にむけて楽しみながらできるリハビリ歌体操をグループで創作したいと考えている。

2. 目的

楽しみながら体力を維持し機能回復をはかることを目的に、リズムに合わせてその人のADLや需要にあたりリハビリ歌体操を創作する。

3. 方法

- 1) グループをA、Bに分け役割を決める。
- 2) 歌を選曲するためにアンケートをとる。
- 3) 振り付け、衣装を考える。車椅子の場合、麻痺のある場合など。
- 4) 特別養護老人ホーム、救護施設の2施設へレクリエーションセッションに出かける。
- 5) レクリエーションセッションでの利用者へアンケートをする。また指導者の意見を聞き今後に関

立てる。

- 6) 学生も各自レクリエーションセッションの感想や意見をまとめる。
- 7) 以上全体を冊子にまとめる。

4. 経過

- 1) リハビリ歌体操の選曲についてはインターネットより大正、昭和の時代に流行した歌やその時代背景を調べる。
- 2) 1) の資料をもとに歌の選曲をするためのアンケートを作成し、歌にまつわる思い出やエピソードなどを記入してもらい、生きた時代を理解することにつとめた。
- 3) 広い年齢層の方から「リンゴの唄」「お富さん」が支持され、曲に励まされた、世の中が明るくなった、などの感想が添えられていた。
- 4) 全体の構想を考え、それぞれの曲に変化があり楽しい歌体操をだっと思える曲にしようと考えた。

- ①「てんと虫のサンバ」……結婚した若い楽しかった頃を思い出してもらおう。
- ②「世界に一つだけの花」…生きる喜びを再認識してもらおう。
- ③「ありがとうの歌」……利用者と介護者、利用者と利用者が握手して触れ合う。
- ④「きよしのドドンパ」……盆おどりで夏の季節を感じ今生きている喜びを感じてもらおう。

以上4曲にアンケートより選ばれた「りんごの唄」「お富さん」を加えて6曲とした。そしてそれぞれの曲に特徴を持たせながらリハビリ効果や利用者の状態をを考え、試行錯誤しながらリハビリ歌体操を作成した。

- 5) 参加する利用者さんの視線で楽しんでもらえるように、カラフルで若さのある衣装を考えた。
- 6) 特養施設と救護施設でセッションを体験させてもらった。

◇特養施設でのセッションにに参加したY. Oさんは、『私達が毎週ゼミの時間に考え、練習してきた歌体操を施設の方々の前で発表するのは、皆さんが喜んでくださるかどうかもとても不安でした。……何曲か歌体操を踊っていくうちに多数の方が歌ってくださったり、私たちの振付を真似して身体を動かしておられる様子が見え私も大変嬉しく成功した！と実感した。』と述べている。

◇救護施設の場合に参加したM. Oさんは、『1回目の特養施設で反省すべき点が見つかりました。例えば時間の配分、利用者とのふれあいの少なさ等……それらの反省点を生かしながら2回目の救護施設でのセッションを行ないました。その結果これから問題点を解決し利用者共に楽しむことができました。セッションに当たって大事なことは私たちだけでなく利用者、職員の方も同じように楽しんでいただかなければということを知ることができました。リハビリ体操を通してもっとお年寄りとおふれあっていきたいと思いました。』と語っている。

5. 考察

二つの施設でのセッションの日が迫るなか緊迫と不安にみちた学習であったが、1回目のセッション

で感じたことを改善して2回目のセッションに臨み、利用者さん、職員の方と一体となった歌体操を実施することができ、課題学習を学んで良かったと感動する瞬間であったと考える。また、昨年実施した歌体操「きよしのドドンパ」を全員で復習して皆で楽しんでいます。と披露してくださった時には大きな拍手喝采がおきた。

利用者の生活の活性化に向けてどのように生活の課題を引き出していく能力を身につけていくか、試行錯誤しているが、自立性や創造性を現況や場面を変えることによって少しずつではあるが身につけていき、目標である感性豊かな人間性を持った介護福祉士に成長していくことを願った学習であった。

(福原信子)

◇日常生活を豊かにする「年中行事」

～アクティビティ・サービスのプログラムを立てるために～

1. はじめに

このグループは1期生より一貫してアクティビティケア (Activity Care) をテーマとしてきた。痴呆高齢者への「新しいケア」確立への切り札として注目されはじめたアクティビティケアを学生たちにも関心を寄せてほしいとこのテーマを選んだ。

1～3期生は文献学習からスタートし、実習施設の現状調査をした。文献学習で知ったことが奈良の地、実習施設に於いても全国施設と同様 (紀要30号「アクティビティケアの一考察」に報告)、どの施設も4～5種類以上のアクティビティケアが行われていることに担当の学生達は感動し、介護福祉士への夢を広げ、ケアへの思いを深く育てていったように思われる。

介護福祉士の業務は、利用者の方々の日常生活を、ADL (activities of daily living : 日常生活動作) 能力の不足するところを補い維持向上に努めながら、自立生活へ向けて援助することを第一義とし、更に近年重要視されてきているQOL (Quality of life : 生活の質) への援助、利用者一人一人が生きがいを感じ、楽しく活気ある快適な日々を過ごさせるよう援助すること。このことを実習現場が受け止め、いろいろ工夫し実践されていることに学生たちは感動したのである。

3期生からはセッション (session) : Recreational Activityを企画し実習施設へ出掛け、実際にセッションも体験学習した。2002年アクティビティ・サービス協議会よりアクティビティ・ワーカー養成指定施設の指定を受け、6期生よりワーカー資格取得への向けて本格的に授業展開をはじめたが、此の「実習指導ゼミ」も資格取得に重要なキーポイントになっている。

1期生より6期生へと年を重ねアクティビティケアをアクティビティ・サービスと名称を揃え、ワーカー養成を意識し、プログラムの立案、セッション (Recreational Activity) も実践できるようにと、テーマを少しずつスライドしてきた。

我が国には豊かな四季があり、古来より一年を通じて四季に応じた様々な行事が行われ、四季を豊かに彩り、日常生活にめりはりを付けてきた。単調になりがちな施設の生活を、高齢者が馴染んできた普通の日常生活のように、豊かに季節を感じながら生活する、この受け継がれてきた日常生活の文化を研

究したい。今年の学生12人は「年中行事」特に「行事食」をテーマにしようと選んだ。

2. 計画

- ①年中行事と行事食を文献学習する⇒春・夏・秋・冬4つのグループに分かれて分担学習する
- ②アンケート調査をする⇒現在の年中行事、行事食を福祉施設、近所の高齢者、学生を対象に
- ③セッションを企画する⇒季節毎に「年中行事」をテーマに30分程のセッションを企画する
- ④手話コーラス「故郷」「赤とんぼ」を練習⇒マスターしセッションに活用する

3. 経過

12人のメンバーは4グループに分かれ四季を担当。更に全体リーダー、文献学習、コンピューターの検索係、セッション企画係、ポスター作成係、製本係、挿絵カット係と自分の興味のあるものや得意なものと、一人何役もこなしながらそれぞれの場面でリーダーになったり、サブになったり、グループワークを楽しんでいた。今年は当初からコンピューターが良く活用され、アンケートの集計係をした学生は「グラフを作るのが得意になった」と誇らしげに語った。

発表の企画係は25分の持ち時間に合わせて工夫を凝らし、リハーサルを繰り返していた。

4. 考察

昨年当学は情報機器が整備され学生全員が自分のパスワードで大学のコンピューターが自由に活用できるなったことにも起因するのか、今年の学生は情報収集、アンケート集計、グラフ作成、抄録作りなど、フルにコンピューターを活用していた。講義の授業にはお喋りしたり、居眠りをしたりしていた学生が、コンピューターに向かって時間も忘れて懸命にとり組んでいた。何時も目立たない学生がコンピューターを前では、イキイキとしたリーダーの姿をみせていた。ポスター書きに才能を発揮する学生、抄録に素敵なカットを入れメンバーから称賛を得ている学生。親しげに語らい、積極的に協力し合う学生の姿に、グループダイナミクスのすばらしい効果を見た。これらは大きな教育効果だと評価されて良いと思う。

テーマに取り組みグループワークするなかで、知らなかった年中行事やその由来、また、それぞれに豊かな「行事食」が受け継がれていることを知り、学生たちは改めて日本の日常生活の文化の豊かさを学び、感動していた。施設で生活する高齢者に、季節感豊かに日常生活を楽しんで頂けるようこれらの受け継がれてきた日常生活の文化「年中行事」を適切に取り入れ行うことは大切な介護であり、アクティビティ・サービスのプログラムと受け止めたようである。

毎年の事であるが、今年の学生たちも友情と達成感に輝いた表情で発表会を終えた。 (田中佑子)

◇「高齢者の歩んできた生活」

～高齢者と良いコミュニケーションをとるために～

1 研究のねらい

利用者のニーズにこたえられる介護を行うためには、良い人間関係を築くことが大切でありその基本

にコミュニケーションの成否が大きく関与している。第1段階の実習で学生は利用者にどのように接したらよいかとまどい、会話がスムーズに運びにくくニーズを捉える以前の課題であると認識している。高齢者は価値観、人生観、人間哲学など個性が大きいだけでなく学生が生きている時代と社会背景が大きく異なり、昔の話や歌を歌われても殆ど判らず相槌を打てずその場で会話が中止してしまう事も多い。利用者もまた豊かな時代に生まれ育った若い人に対して、話しても判ってもらえるはずが無いと思っている人々も多い。高齢者の抱えている喜びや悲しみや無念さなど多くの思いに対して、介護者がよき聞き手になることでどんなに慰めになるのかはわかり知れない。「自分のことを判ってくれる」「私に関心を持ってくれている」思いが利用者の心を開き人間関係が深まっていく。コミュニケーションの橋渡しの方法を学ぶこと。激動の昭和の時代を生き抜いてきた人々の生活史を学び、施設や地域社会で生活している高齢者の「生きがい観」を知ることは、利用者のQOLを高めるための援助の方法をつかむ手がかりへとつながる。

2 取り組み方法・経過

1) 研究目的

何を研究するのか、何故それを研究するのか研究目的を提示した。学生同士ディスカッションを行うなかで学生の問題意識が明確となり研究への視点が定まっていた。キーワードは「コミュニケーション」となった。

2) グループ編成

学生同士話し合いを行い、興味ある内容を持ったもの同士がグループを作った。11人を2つのグループに分けた。

3) 研究テーマの決定

Aグループ：高齢者と現代の若者の生活観、価値観について結婚、食生活、行動様式より探る

Bグループ：戦争時代を生きてきた高齢者の生活・・・食生活、仕事、服装・・・について

4) 研究方法

文献検索によるものと、質問法（質問紙及び面接）による実態調査を行った。

研究期間を3つの時期に分け、各々についての到達目標の確認を行った。

- ・第1期：テーマ決定のための内容検討と具体的活動計画を作成し、役割分担決定。アンケート用紙作成係（質問内容、対象の決定及び依頼）、文献検索係（図書館、インターネットにより資料を集める）。
- ・第2期：担当学生は土曜日に全員に資料を提出し、研究の進捗状況の把握とディスカッションによる研究の軌道修正を行った。
- ・第3期：研究結果をまとめるために文献による内容と回答用紙の分析と考察を行い、研究を完成させた時期、ゼミの発表に向けての冊子の作成と発表のための工夫を話し合い準備した時期でもある。

3 研究より学生が学んだこと レポートの一部を抜粋する。

テーマ「戦争時代を生きてきた高齢者の生活（食生活、仕事、服装）について」

私達はまず祖父母について話し合った。祖父母は私たちと違いもったいないという気持ちがあり、服に穴があいていても捨てることなく繕って着たり、賞味期限が切れている食物でも臭いや味を見て支障が無いと思えば食べる。又自分の物はめったに買わないのに、孫には欲しいものがあれば快くお金をだしてくれる。実習時、利用者さんが私達にお菓子をこっそりくれるなど祖父母と利用者さんとの優しさを重ね合わせた。なぜ、私達との生活感覚の違いがあるのか疑問をもち、高齢者の昔の生活を知りたいと思った。聞き取り調査によれば、食生活は「米」、「かぼちや」や「さつまいも」が主食で、タンパク源としては「タニシ」や「イナゴ」なども食べていた。調理方法はシンプルで、食事の量を増やすために粥や雑炊などで空腹感を補った。戦争が始まり軍事産業に金がたくさん使われ、食糧事情も悪くなってきた。主食の米の配給は一日約300gであり、生き延びるためにヘビやカエルなどを食用とした。高齢者が「ご馳走」だと思っている食べ物、お刺身・赤飯・数の子・お寿司などは、私たちにとっては特別な食べ物ではない。しかし、施設では誕生日会・七夕・お盆・お月見・節分・お正月・お花見などに、酒・赤飯・おはぎ・刺身・尾頭付きの鯛などの「ご馳走」を食べる事によって生活の刺激や、生活のメリハリをつけている。

仕事について、一次産業（肉体労働）をしていた。家族全員で働き幼い子供も洗濯や水汲みなどの手伝いをしていたことなど昔の仕事の大変さを知った。利用者の仕事歴を知り個別ケアにいかしたい。例えば、農作業をしていた利用者に花を植えて育てることをお願いすることで植物が成長する楽しみを感じてもらい、更にまわりの人から「きれいな花ですね」等言われることにより、自分の存在を認めてもらっていると感じ、人の役に立つことで生きがいを持つことができると思う。

衣服について、高齢者が服に穴が開いても捨てるのはもったいないと着る物も大事にされているのは戦争により物価統制となり衣服も購入する事もままならなくなってきた事、兄弟のおさがりや手作りの洋服を着ていたなど衣服を含め物を大事にされる気持ちが理解できた。

4 評価

①学生は参考文献を調べるために、過去の学生の「課題学習」や本学図書館、市立図書館、書店などに足を運んだりインターネットで調べたりしていた。借用した本の内容が適切でない場合が多く、再々度調べに行く等努力していた。この学習意欲を高く評価している。

②研究に行き詰まった時、学生の反応を見ながら指導の量を計算した。介入しすぎると依存的になってしまうし、時機を失するとやる気をなくしがちになることを考えての事であるが、指導方法が良かったかどうか、自分で評価できかねている。

③学生は、調査などの集計の分析、解釈の方法、研究目標への結びつける方法についてかなりの方向性をみいだせたのではないと思う。今後の実習時この経験は生かせるのではないか。

④メンバー同士、十分に話し合いながら決定し行動するグループと、リーダーが独断で行うことにより他のメンバー同士との意思疎通を欠き学習意欲が低下しているグループがある事に気がついた。グループワークのあり方について本人及び他のメンバーに指導を行ったが改善されず第三期にやっ

とまとまったグループもあった。

- ⑤過去の生活史を学ぶ中で、戦争が人間の生活すべてを破壊していることを知り、現在世界で起きている戦争や紛争とそこで生活している人々に目を向け、平和への一人一人の努力の大切さを学んだ。福祉のあり方を考える上で視野が更に広がったと思う。

5 今後の課題

介護は人間対人間の関係の中で展開されていく。介護者は利用者の個別性を十分に認識し専門職としての知識や技術を適応する力を実習の場で形成されていくが、その根底には心の交流、信頼関係の成立が重要である。人間関係の基本に「コミュニケーションのあり方」がありその関係を左右することを認識させたい。担任としてコミュニケーションの取り方が不得意な学生が少なからずいる事に気づく。自己評価と他者評価の間にずれを認め、安定性を欠き過度に劣等感を抱いたり、自分の中に閉じこもったり、学生同士の間人間関係に悩み介護福祉士になることに自信を失いそのまま放置すると退学につながるケースもある。教育活動は、教授活動と生活指導が相互に関連して有効に機能しなければその成果が期待できない。教育する者は、高齢者や障害者の生と死を社会から専門的に引き受け実践する一員としての介護福祉士の望ましい態度は何かを明確に持ち、学生との日々のかかわり合いの中で伝えていく責務がある。基本的な生活習慣や生活態度や行動について、対人関係、人間関係のありかたについて・AGHや学校行事を通して集団への適応の方法等場や機会をとらえ伝える。人間関係に悩む学生や学業への意欲を失った学生の訴えを受け止め助言すると同時に、学生の送るサイン（欠席etc）を見落とさず面接などを行い、必要な助言・指導を行う。学生は集団の中で共に考えたり話し合うことにより、人間関係のあり方、協力の姿勢が育成される。

今回のゼミにおける筆者自身の目標として学生が ①常に問題意識をもち日々の課題を持つ人間として育つこと ②それらを解決する方法を常に考えそれを試みる態度をもつこと ③新しい問題を発見し研究的に勉強する姿勢を持つこと、を狙いとした。

思考する姿勢、態度と行動力を持ち、暖かい気持ちで利用者に寄り添う人間として、成長への動機づけのステップになればと願っている。

(高桑慧子)

◇高齢者が愛唱する歌について学ぶ

1 はじめに

福祉音楽論で学ぶように、人間にとって歌はとても大切なものである。高齢者の子供の頃の歌、人生楽しいときの喜びの歌や祖母が歌っていた懐かしい歌、そのようにして唄い続けられている歌を知り、歌を通して高齢者とのコミュニケーションを円滑にして、より有効なアクティビティ・サービスを学ばせたい。

2 目的

実習施設で高齢者が歌っている歌を聞いても、その歌を全く知らなくて多くの学生が困っている。そ

ここで高齢者理解する為、明治、大正、昭和の歌を学び高齢者と共感しながら歌う事が出来るようにする。又、平成14年度より唱歌、童謡が教科書から消えている。この現状を把握し今後いかにあるべきか考える。

3 方法

- 1) 各時代の歌と時代背景を文献学習する。
- 2) 唱歌、童謡の歴史を学び、最近教科書から消えた唱歌について調べる。
- 3) 高齢者に好きな歌、思い出の歌、家族とよく歌った歌等、質問紙による聞き取り調査を行う。
- 4) アンケートの結果を集計、分析しまとめる。
- 5) 恒例のお手玉づくりをする。

4 内容及び結果

60歳代～80歳代の高齢者90人に対する質問紙による聞き取り調査の結果は高齢者の好む歌には幼少時代「とうりゃんせ」、「かくれんぼ」、「夕焼け小焼け」「荒城の月」「こいのぼり」「春よ来い」「故郷」『赤とんぼ』「どんぐりころころ」などが上位を占め、心に残る歌には個々の思いがあり、「軍歌」…軍隊にいたから、「長崎の鐘」…戦争が終わりほっとした時原爆で長井博士がなくなったこと、「りんごの唄」「東京ウギウギ」…戦争で家も無く毎日学徒動員で毎日荒れた道を工場に通っていた時よく歌ったと、この時代特有な戦争が心に影を残していた。「仰げば尊し」、「蛍の光」は卒業式の思い出として強く心に残っている。学生時代の音楽の授業では「荒城の月」「ふるさと」「旅愁」があり、特に「荒城の月」は各年代共に親しまれている。家族と歌っていたのは「お正月」「お雛様」「こいのぼり」と季節の行事に関連している。教科書から消えた、唱歌、童謡、についての質問には是非残して欲しいという意見が多かった。

5 発表

ゼミ学生13人を、各時代別とアンケートの結果の4グループに分かれ、各グループで代表的な歌「こいのぼり」「我は海の子」「シャボン玉」「夕焼け小焼け」の曲を選びそれぞれ得意な方法で大正琴を演奏し、お手玉を使用したグループはエプロンのポケットに予備のお手玉をいれてスムーズに行える工夫をしていた、又シャボン玉の歌はシャボン玉を扇風機を使用して飛ばそうと計画したが飛ばした後の掃除が大変なので、風船に変更して風船を沢山飛ばして演出した。発表した曲の選曲に関しては色々話し合い、議論して上記の曲となった。ゼミ委員として2人選出し委員を中心に決められ時間内にいかに、効果的な演出をするかタイムスケジュールを照明、音響等も含め詳細に作成し練習を重ねた。カラスなどの小道具も各自責任を持ち作成していた。又冊子作りは印刷、製本と全員一丸となり日頃サボる学生も「私達はやる時はやるのよ」と言いながら仕上げた。

6 評価

学生は唱歌、童謡の歴史、及びその曲はどんな思いで作られたかを話し合った、その曲まつわるエピソード

ソードは興味深く時間の経つのを忘れ、目を輝かせていた。エピソード集も作成すれば歌に対する知識もより深まると考え、今後の参考になった。又、発表では、全て学生で選曲、演出をし、時間配分の為、衣装も工夫をしていて、自主的に計画、運営は出来たと思う。文献学習では怠けていた学生も一丸となり練習している姿は『私が抜けたらいけない』というグループ学習の意義も理解できたと考える。お手玉が下手なのと選曲ミスでテンポが合わない場面もあったが当ゼミでは例年お手玉作りをしているので、今年も作成したが針を持つことの苦手な学生も悪戦苦闘しながら作成していた。これが施設において役立てば幸いである。

ゼミ発表は教員は少しのアドバイス程度で、学生がきっちり行えたことは、自主的に企画、運営をする能力は養えたと考える。尚平成16年8月1日奈良町振興財団主催のお手玉大会に1回生3名出場をしたが惜しくも全国大会参加は果たせなかった。(阿南國子)

◇楽しみながら学ぶ「音楽セッション」

日本音楽療法学会では音楽療法士の国家資格化に向けて議論が白熱している。一方、『音楽には人の心を癒す不思議な力があると言われて久しく、多くの施設でQOLの向上を目的にした音楽セッションが広く行われるようになった。

こうした社会的状況を受けて本学福祉学科では平成12年度より「福祉音楽論」を開講し、音楽療法を基盤にした介護への音楽の活用を研究している。課題学習ゼミの一領域を担当したのは平成15年度からであり本年で2年目になるが、本グループを選択した学生はI回生時の福祉音楽論をモチベーションとして積極的に参加しており、福祉音楽論の初回に実施したアンケートからも本ゼミの参加者の音楽的経験並びに音楽への意識の高さが見て取れる。

前回は、音楽と踊りは密接な関係があることから、参加学生の強い希望もあって「金八先生」の『ソーラン節』(踊り)を中心に発表した。今回は高齢者諸施設における音楽セッションに的を絞り、実際に演奏することを課題にして、一人ひとりの演奏力や歌唱力を高めると同時に、キーボード・アンサンブルにウエイトをおいた取組を試みた。

1. 取組と経過

『「We are the World」はアフリカ難民救済のために、M.ジャクソンやL.リッチーのほか、アメリカの歌手45人が加わって作った曲といわれ、「尊い命を救う時が来た。必要なのは愛だけだ。私たちがもっと明るい未来を作るのだ。」と歌われている。』※

この曲は高等学校の教科書でも取り上げられており、本講座の受講生が全員一致して合奏したい曲に挙げた。世界的にヒットしたアメリカンポップスであり、印象的な旋律を有していて、若い学生の人気を集めるだけあって魅力に富んでいる。

一方、16分音符のシンコペーションが連続するモダンなリズムが支配的なこの曲を演奏するということになると、音楽的経験が乏しい学生にとってはなかなかの難曲と言わざるを得ず、どのような楽器を使用し、どこまで平易なアンサンブルに編曲するかが、次の課題として浮上した。学生の演奏に対する

熱意とは裏腹に、一人ひとりの音楽体験や演奏力がつかめないうまま、ギブアップするかも知れないという不安を抱えて出発したのだった。

しかしながら、この不安は回を追うごとに徐々に解消していくことになる。学生たちは自主的な相互協力の中から次第にチームワークを構築していった。以下、授業展開の要点を記す。

- ①本グループでの研究を希望した12名について、本ゼミの課題研究の趣旨説明を行い、グループとして何をどのようにしたいか、各人の役割は何か、などについて具体的に考える。
- ②学生の自主的な話し合いを通して「てんとう虫のサンバ」、「朧月夜」、「花」（喜納昌吉作詞・作曲）を歌い、「We are the World」（M.ジャクソンほか作詞・作曲）を合奏すること、さらに、これらの資料や解説などをまとめたレポートを分担して作成することなどを決めた。
- ③「We are the World」について、12名のこれまでの音楽的経験をベースに担当楽器を考えると同時に、アンサンブル用の楽譜を探す。
- ④適当な楽譜が存在しないので、コードネームを手がかりとし、学生一人ひとりの演奏力を考慮しつつ、練習と並行して編曲作業を進めた。
- ⑤演奏形態は、これらのプロセスを経てキーボード・アンサンブルに落ち着いたが、学生は必ずしもキーボードに親しんでいる訳ではなかった。そこで、ピアノによる曲の正確な把握のための指導を繰り返し実施した。
- ⑥そうする内に、学生たちの中から自発的な取組や練習が見られるようになった。
- ⑦やがて、自然発生的に誕生したリーダーと、やらねばならないと考えるメンバーの思いがうまくかみ合い出し、効果的な練習が行われるようになる。
- ⑧「てんとう虫のサンバ」については、踊りや大道具・小道具に至るまで、学生たちのオリジナリティを尊重し、個性的で創造性豊かなアイデアを可能な限り採用した。
- ⑨「てんとう虫のサンバ」、「朧月夜」のピアノ伴奏についても、学生の自発的な意向を受けて、それぞれメンバーを代えて担当させた。
- ⑩また、「朧月夜」は、歌う学生の希望によりB-dur（変口長調）とかなり低めの調を採用したが、これは福祉施設でのセッションを前提に、高齢者にとっても歌いやすい音域を考えた上でのことでもあった。

2. 結果

7月14日の「課題学習発表会」での解説付き演奏、および取組の記録に集約されているが、本グループの中心課題として取り組んだキーボード・アンサンブルについては楽器の限界もあり、不満がない訳ではないが、開講当初に想定した目標を遥に超えていた。

当初、歌の発表として「てんとう虫のサンバ」、「朧月夜」、「花」の3曲を考えていたが、「花」は練習段階で発表時間などの関係から割愛することとし、残りの2曲について重点的に取り組み、振り付けや背景を考えるなど、実際のセッションを想定し、音楽の楽しさを一緒に享受できる方法はないものかと智恵を出し合った。

3. 考察・評価

本課題研究のテーマとしていた「演奏力や歌唱力を深め、実際のセッションが行えるように努めたい」とする所期の目標は、音楽的には部分的に修正しなければならない一面もあるが、学生たちが自主的かつ意欲的に取り組んだ結果、一応の出来栄えに仕上げたことは賞賛に値する。

また、プロセスや結果に多少の問題点や課題を残したものの、思いがけない苦勞や新たな発見の数々は、学生の自主的活動を尊重してきた本課題研究の収穫と言えるかもしれない。葛藤の末に、いつも建設的な意見を優先させ、学生一人ひとりが各人の課題に立ち向かった点は評価したいし、課題研究でのこれらの貴重な経験は、今後の学生生活や将来の介護福祉士としての仕事に確実に活かされるものと確信した。

(伏見 強)

V 総括・今後の課題

1. 各学生の課題ゼミ所属決定の為に、どのテーマを希望するか第1から第4までの希望調査を実施した。1つのテーマに第1希望を出す学生が多く、調査結果に偏りがあった。音楽、身体表現活動に希望者が集中した。グループ編成が有効に機能するために教科会議で、学生の学力・リーダー性等を考慮したメンバーとなるよう調整した。
2. 研究導入時はリーダー性を持っている学生が少ない事、自分の意見を素直に表現せずまわりの思惑を考えて行動するので発言が消極的であった。研究に対する動機づけ、方向性について教師が介入せざるを得ない状況が多々あった。
3. 担当教員との係わり合いの中で学生が研究のねらい・目標を明確に理解できるようになった時期からは、チームワークがとれはじめ協力して目標に向け自主活動が活発になった。文献調査、アンケート調査、レクレーションセッションなど教員の予想以上の活動意欲をみて、学生自身自主活動を楽しんでいた。ここに至って研究成果が飛躍的に伸びていった。
4. 研究成果をグループ毎に冊子にまとめた。絵を描く、ピアノを弾く、コンピュータで文章を処理するなど、各学生の能力、個性が発揮でき学生の満足度につながった。
5. 課題ゼミ発表会のために「課題ゼミ発表企画運営委員会」を発足させた。委員会のメンバーは会場準備、照明音響、司会等、自主的、主体的に運営し学生の創意工夫がみられ意義のある会となった。
6. 学生はやり直しのきかない発表会の緊張感の中で、集団における個人の役割の大切さを自覚し、同時に音楽の喜びと達成感を実感した。
7. 発表会には1回生も参加させた。介護とはどういうものか、介護の楽しさについて2回生の発表を通して理解させたいとの意図で伝統的に実施している。参加した1回生は施設実習への期待を膨らませていった。
8. 発表時1回生用にはレジメを配布したが、発表内容についてより深く知りたい、学びたいとの要望が強かった。施設実習時に活用したい、学習の参考資料としたい等の意見が多く、教育効果を考えて来年度は参加者全員に研究資料を配布したい。
9. 従来より研究ゼミのテーマについて教員より提示しているが、今後学生の意見を取り入れテーマの

設定については幅広い視野で考えていきたい。

VI おわりに

理想の介護福祉士像を求め、学生たちにも介護の楽しさを、介護の心、伝えたいと願って「課題学習ゼミ」の構想が生まれた。1期生より、今日まで創意工夫を重ねながら進めてきた過程で、アクティビティ・ワーカー資格取得が視野に入って来るようになり、2003年入学の6期生より本格的に資格取得へ向けての授業展開をした。施設実習に於いてコミュニケーション技術やレクリエーションの企画、実施を主体的にできるようになり「課題学習ゼミ」の効果が上がっていると考えられる。

平成16年度全国教職員研修会に発表した。

参考・引用文献

- ・ アクティビティ・サービス研究協議会（NPOアクティビティ・サービス協議会）編集
「アクティビティ・サービス総論」 2000
「A.S.N.（アクティビティ・サービス・ニュース）」
- ・ 受託団体財ほけ予防協会 痴呆高齢者ケアプラン査定事業「アクティビティケア実態調査」他調査報告書 5冊 1996～2000
- ・ 奈良文化女子短期大学福祉学科「課題学習」研究抄録 1 2 3 4 5 6期生 6冊 1999～2004
- ・ 村尾壽美・忠政敏子・福原信子・田中佑子・高桑慧子「実習指導（演習）の展開～グループ別課題研究の試み～」奈良文化女子短期大学紀要31号 2000
- ・ 西澤 稔「お年寄りの歩んだ時代」中央法規
- ※ 浜野政雄、他「最新高校生の音楽Ⅰ」音楽之友社 16～17 1997
- ・ 寺島龍子「いきいき若返り歌体操」筒井書房 2000
- ・ 寺島龍子「自由になあーれー ー歌体操で楽しいー」生活科学研究発行
- ・ 多田千尋・芸術教育研究所「リハビリ手遊び」婦人生活社 1998
- ・ 川崎 洋「大人のための教科書の歌」いそづぶ社
- ・ 堀内敬三・井上武士「日本の唱歌集」岩波文庫
- ・ 服部公一「歌ではじめる幼児教育」チャイルド社
- ・ 横田憲一「教科書から消えた唱歌童謡年表」産経新聞社
- ・ 海沼 実「童謡・心に残る歌とその時代」NHK出版
- ・ 忠政敏子・田中佑子「特別養護老人ホームの介護現況における ～音楽療法の効用について考察する～」奈良文化女子短期大学紀要31号 2000
- ・ 忠政敏子・田中佑子（発表）「介護福祉士教育におけるアクティビティケアへの取組み」日本バイオミュージック学会関西支部・第2回学術大会 2000
- ・ 忠政敏子・田中佑子「介護福祉士教育に於ける今日的課題 ～アクティビティケア～」奈良文化女子短期大学紀要32号 2001